

わったい

鳥取養護学校
研究研修部だより
第14号
平成26年5月26日

暑さを感じるようになってきました。気温は安定しないし、花粉やらなんやら飛んでいるし…という切ない季節ですが、体調管理に気をつけていきましょう。

先日の研究始まりの会では、研究の今年度の方向性についてお話をさせていただきました。今年度は、3か年計画の2年目です。昨年模索し、定め始めた方向に向かって、より深まった内容になっていけばと思います。研究を深めるにあたって、この研究研修部だより「わったい」が少しでも皆さんのお役にたてる内容にしていきたいと考えています。「わったい」は、研究の各グループの進捗状況をお伝えしたり、日々の学習に役立つ情報をご紹介しますためのものです。2月に1回のペースで発行予定です。皆さんからのお役立ち情報もぜひ職員で共有していきたいと思いますので、原稿協力もお願いする予定です。よろしくお願いします。

今回は6月9日にある2, 3グループの研究会について、「高次化ってなんだろう？超初級編」と題しまして、高次化についてまとめていきたいと思います。

高次化ってなんだろう？

6月9日の研究2, 3グループのグループ研では、アドバイザー派遣事業を活用し、研修会を行います。その中で淑徳大学発達臨床研究センターの川口真理子氏をお迎えして、「感覚と運動の高次化理論から考える子どもの姿」という内容でお話していただきます。…ところで、高次化ってなんなんでしょう？私は高等部の単一障がい学級にいますので、研究の中で高次化に触れることがなく、「すごいな、重複障がい学級の先生方は高次化についてよくご存じなんだな～。高次化をテーマに研究していないとはいえ、同じ学校なのに全然知らないってちょっと恥ずかしいな。」と思っていました。さらに言えば、高次化というのは肢体不自由の子どもたちの発達に関する内容だと思っていたので、勉強したところで単一障がいの子どもたちには関係ないかもしれないし…とちょっと逃げていた部分もあります。しかし、研究部員なのに他グループの内容知りませんってというのはよくないと思い、今年度ほんの少しだけ勉強し始めました。同じくらい高次化初心者の方のために、高次化という発達理論を勉強するメリットをお伝えできたらと思います。まだまだ分からないことだらけですが、温かい目で読んでいただけたらと思います。



メリットその1「自分の安心」

発達を勉強する、高次化という理論を勉強するメリットってなんなのでしょう？私は、自分のためではないかと思います。もちろん最終的には授業や指導に生かすためなのですが、やっぱり自分が安心したいからです。子どもたちが今どのような状況にいて、自分がどのようにアプローチすればよいのかは、いつも不安です。「これでいいのだろうか？子どもたちの役に立っているのだろうか？」と思う毎日です。でも、自分の中に「この発達理論で見るとこの段階だ」という指標があれば、次の目標が見えますし、次の段階に進めば、学習内容が合っているということにもなります。そういった目安があると、私たちにももっと安心と達成感が生まれてくる気がします。ではいろいろな発達理論の中でなぜ高次化？という点についてメリット2と3で書いてみます。



メリットその2「幅広い」

本を読んだり、同僚から話を聞いたりした第一印象は「カバーしている範囲が広い」というものです。基本的には、生まれたばかりの子どもから言葉を使ったコミュニケーションが上手に取れるようになるまで（おおざっぱですね。イメージ的には小学生です）の正規発達についてもしっかり書いてありながら、自閉症、知的障がい、発達障がいのことについても書いてあり、「これしっかり理解できたら、発達について、そして発達の遅れについてだいたい分かるなあ」と思いました。発達について勉強しようと思っているけれど、自閉症も勉強しないといけないし、知的障がいとも関わっているからそれも勉強しないといけないし、どこから勉強すればいいの？という人にはとてもおすすめです。

メリットその3「感覚（操作）、認知、情動（気持ち）を関連づけている」

言葉を多く知っていて話はできても、その言葉を理解して使っていない子どもがいます。言葉をたくさん覚えても、たくさん話ができて、コミュニケーションが苦手な子どももいます。そういった発達のバランスの悪さを、身体だけの視点から、認知だけの視点から、気持ちだけの視点からとらえるのはとても大変です。「なんで？どうして？」となることも多いと思います。しかし、高次化ではそれらを関連づけているので、どこのバランスがどのように悪くて、どこに働きかけていけばいいのかが分かりやすいと思います。一つの視点からでなく、いろいろな視点から見るという実践例がたくさん載っているので、自分のアプローチの仕方を広げてくれると感じました。

それでは、私が出会った事例を高次化の視点で見たいと思います。

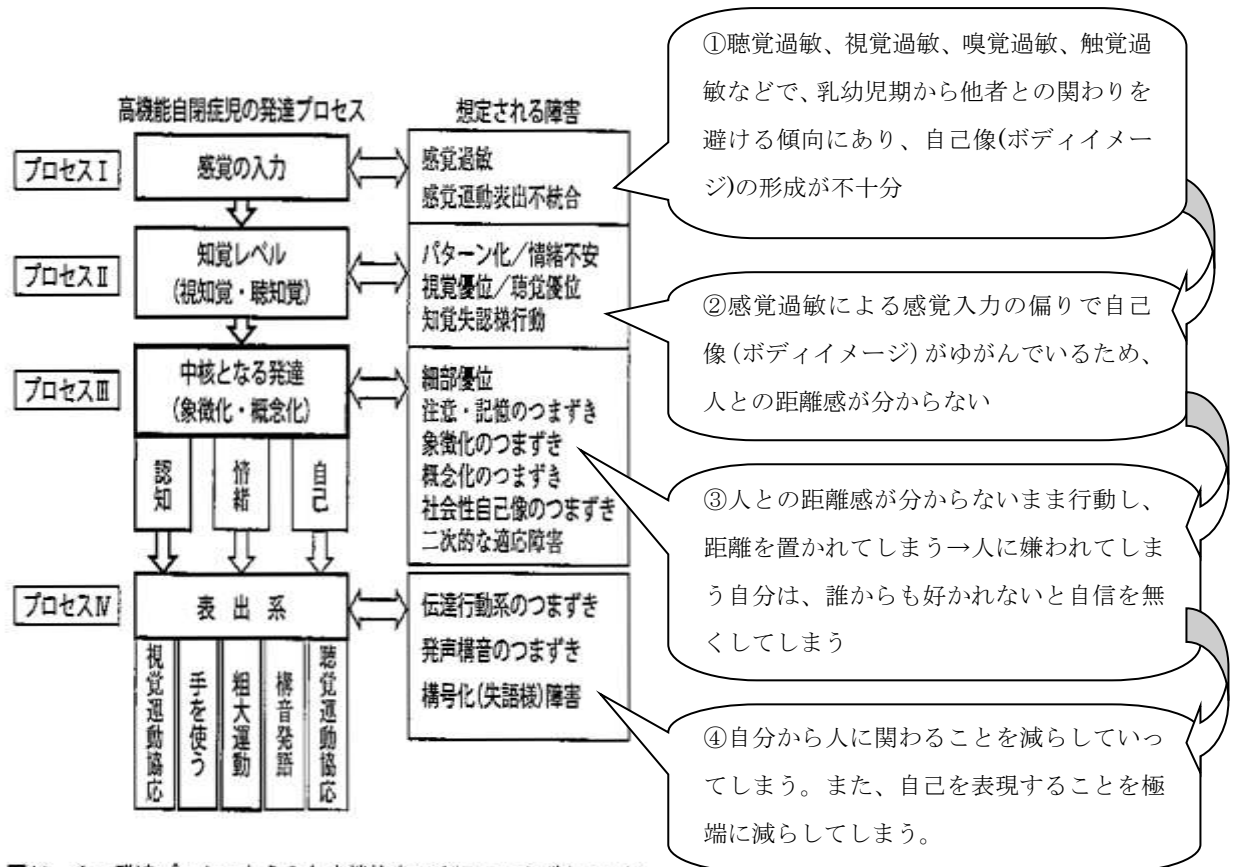


図11-8 発達プロセスからみた高機能自閉症児のつまずきの理解

この事例の場合、子どもたちが私たちに訴えてくるのは③か④のあたりではないかと思います。それを、単純に「自己肯定感が低いから人とのかかわりが苦手なんだ、人と上手にかかわる体験を増やして、自己肯定感を高めよう」とか「人とのかかわりが苦手ならば、ソーシャルスキルトレーニングをしよう」と考えては、本人の本当の困り感に気づかないかもしれません。感覚過敏が強かったり、情報のとらえ方に特徴があったりする場合は、その部分へアプローチをする必要があるでしょう。それが特別支援で重要となる「自立活動」で行われるべきことだと私は感じています。病気や障がいによりいろいろな二次障がい強く出ている生徒が病弱特別支援学校には多く在籍しており、行動や心理面の不安定さに目が行きがちです。しかし、その裏に何があるのか？それを考えさせてくれる視点が、高次化を活用したとらえ方にはあると思います。感覚過敏について、自閉症の対応について、二次障がいについて、それぞれの分野の詳しい専門書は多くともそれを関連づけたものは少ないので、高次化を活用することで、いろいろな視点から子どもを見ることができるのではないのでしょうか。